

て、記録の概要を述べる、但し時間の都合上、所々を抜き出す事にする。

次に第二表は、この各群の子供達の発達していった経過を示すものである。(図表は頁数の都合により省略)

さて、先述の具体例からもうかがわれる様に、これ等十五名の子供達は、グループ行動の中で各々異った現れ方をして徐々に発達していったのであるが、各群の子供の遊び方の段階別を山下先生の著書を参照し、それにならって別けてみる時、吾がA群は、三段階の遊びを主として、四段階。B群は二段階を主として三段階。C群は一段階を主として二段階の遊び方をしている。その発達の過程を第三表で見るとA群の四人にB群の五人が入って九人になり、B群では、残った二人と、C群からの三人が入って五人になり、C群は一人になった。(表省略)

ブラツグが二才台では独り遊び、傍観、並行的遊び、の三つが大部分を占め、三才台から四才台へと年齢が進むにつれて急激に減ると言っているが、ここでも同じ様な現れ方をしている。

以上、簡単ではあったが、一年間の観察記録の結果を報告した。子供は集団生活していると、放置しておいても、或る時間が経過すると、社会性が発達し、ある程度迄の社会的行動が出来るものと言えよう。但し、C群のNが現在、吾が幼稚園生活になじむ事が出来た事例から見ると、二・三才児の保育の時に適切な誘導がなされていたら、比較的短時間で、他のC群の子供がB群に移った様に、発達していったかも知れない、然し社会性を早期に養う事自体にも問題がある。ともあれ、この度の試案の結果から痛感させられる事

は、二・三才児に、基本的習慣の基礎づけこそ、第一義的なものと言う事が出来、社会性の問題は、第二義的なものである。現在二・三才児保育を単なる自然集団としての観察ではなく、保育するとう意図のもとに、前年度の試案を基にして、計画を立て、その生活を積極的に誘導し、尚行動観察の記録をして未解決の問題を研究しつつある。最後に、附言したい事は、この研究により、二、三才児といえども「リーダー型」「模倣型」「けんか型」と言う型や、「仲間になる子供の性質の分類」等の課題が浮び出て来た事である。

マザリングの実験

名古屋市立保育短期大学

珠川善子
安藤味法子
甚目朋

施設に収容されて育つ子供は、ホスピタリズムによって、円満なパースナリティの発達が阻害されるといわれている。マーガレットリブルはこのホスピタリズム解消の一方策として、マザリングを主張した。私共はその重大な意味を感じて、追試実験をした。

マザリングとは、リブルによれば、成熟した感情の健康な女性が、子供を生み育てる時自然に現わす凡ての愛撫の動作を含むもので、食物と同様に欠く事の出来ないものである。

実 験

(1) 対象 S乳児院に収容中の特に愛情飢餓に陥っていると思われる男児A、女児B、兩人共、不活潑、無気力、無反応、無愛情が著るしく、具体的にも精神的にも発育が標準よりおかれていた。

(2) 実施 昭和二十九年一月一日より一月末日までの三カ月間毎日時間をきめて接触し、おしめの取替、入浴、食事の世話、遊び相手、理髪、授乳、頬ずり、話し相手、抱き歩き等、時間中すぎなく適宜行動した。

事 例

▽A児、昭和二十八年九月生れの男児△母二七才の時、九カ月で出生し、人工哺乳で栄養せられていた。その後、母親は本児を父の許に残し、離別し、父親は本児を遺棄し、乳児院に収容されたものである。当時生後五カ月、生後十一カ月に於て、身体発育は約三カ月、精神発達は約四カ月のおくれが、認められた。私達が訪れた当時はまだ首もすわらず顔面蒼白で貧血症状を呈し、動作ものろく独り立ちがやっとで、這う事は出来ず、あやしても殆んど無反応である。

本児が私達になれるに従って、にこにこして、服のボタンやバッチを珍らしげにさわってみたり、日を重ねるに従って、行動や表情にある程度の積極性が認められようになって来たが、まだ、普通児に比して、消極にでて不活潑であった。十一月になるとすっかり顔を覚え、部屋に入ると嬉々として私達を迎えるようになり、嫉妬の動作も認められた、甘える動作が目立って来て、部屋に入ると、早く抱いてくれと、甘え声を発し、独り遊んでいても、帰ろうとすると帰らずまいとするようになった。独占しようとする傾向もみられた

十一月の終り頃には、独り遊びを好んでするようになり、持続時間が次第に長くなって来た。十二月に入ると、食欲旺盛、夕食後七時頃から就眠、熟睡が認められた。表情は明るくなり、気力が出、顔色がよくなり、玩具をもっておしゃべりしながら、あちこち行ったり来たりした。この月をはじめてマンマとはっきりいった。及私達の動作の真似をする様になった。この頃の発育は、大体標準に比して、運動の発達一カ月のおくれ、身体発達二カ月のおくれの程度に追っていたと認められた。

▽B児・昭和二十九年一月五日生の女児△貧困家庭の八人兄弟の四女で、生後二カ月に母が腹膜炎で死亡、措置収容となったものである。マザリング開始の十月当初、本人生後九カ月をすぎても、泣きも笑いもしない、愛想のない無表情な状態であった。十一月になると、時間になるまで平気であったおしめのよこれを、よければ取り替えを要求するようになり、とつかえれば、満足を示すようになった。甘える傾向を認められるようになり、泣く運動も多くなり、甘え泣きも多くなった。又声を立て、笑うようになって来た。この頃は約一カ月の遅滞を認められ、人見知りの動作が目立つようになり、名を呼ぶとふり返るようになった。十二月になると帰る時泣いて後を追うように声を立てる情緒や要求が、あらわに現われるようになりました。一月になると食事が順調になり人見知りがはっきりしてきた。

以上二例に於て、明らかのように表情に暗いかげが取り去られて明るくなり、行動のおくれが促進せられ、社会性の変化が、目立っ

て来ている。施設に於ては、行きとどきにくい個人的な一対一の母性的愛情が、ホスピタリズムの重要な一因子をなすと考えられ、マザリングは、この方面においてホスピタリズムを或程度解消するのではないかという事が、私達の僅か二例ではあるが、顕著に認められました。収容児の変化によって充分予想せられる事であつて、今後更に数多くのケースについて実験するならば、より積極的な結論が得られると思ふ。

幼児に与える保母の影響について

名古屋市立保育短期大学

珠川善子
岩瀬節子

研究目

就学前の園児の行動並びに態度に、決定的影響を及ぼすものは、家庭に於ける父母と、保育園に於ける保母の行動並び態度にある事は、云う迄もない事である。

一日の生活の大部分が、保育園での生活である為に、園児にとつて保母は、親に次いで、絶対的権威者であり、保母への同一視の欲求が極めて強く、保母の行動及び態度を模倣する事によって、この欲求を充たそうとするのである。

保母の一挙手、一投足は、何らかの形で、子供の行動並びに、反映するものと考えなければならない。従つてこの前提に立つて、私はこの調査を試みた。

手続

A 対象及び調査期間

満六才児の男子四五名、女子四五名を対象とし、昭和三〇年一月中旬年二月中迄の約一カ月を調査期間としました。

B 調査材料

幼児が日頃好んで良く用いる、黄色、青色、赤色、緑色、白色の五色を利用して、各色別に直径一〇センチの花を作り、材料とする。

C 調査方法

個別的に五ヶの花を与え好む花から選ばせて幼児の好む花と、嫌う花との序列作製を行う。

上の調査から、幼児の最も嫌う花（緑花）を園の諸先生方の胸につけて頂く（五日間）

嫌う色の刺戟を与えた五日後に、再度好む花と嫌う花とを選ばせて記録し、好悪の序列作製をする、これを最初のと比較し見当するのである。

結果

総数の九〇名に於いて調査した結果、第一回調査の場合、好む花としては、黄色が最上位で（二九名）次いで赤、青、白、緑（二二名）となり、嫌う花に於いては、緑花が最上位で（二三名）次いで、赤、青、白、黄と表われている。（第一表を参照）